

岷山の隠士

国枝史郎

青空文庫

1

「いや彼は隴西ろうせいの産だ」

「いや彼は蜀しよくの産だ」

「とんでもないことで、巴西はせいの産だよ」

「冗談を云うな山東さんとうの産を」

「李広りこうの後裔だということだね」

「涼武昭王りようぶしょうおうこうの末だよ」

——青蓮居士せいれんこじ、謫仙人たくせん、李太白の素性なるものは、はつきり解わか

つていないらしい。

金持が死ぬと相続問題が起こり、偉人が死ぬと素性争いが起こ

る。

偉人や金持になることも、ちよつとどうも考えものらしい。

李白十歳の初秋であつた。県令の下もとに小奴となつた。

ある日牛を追つて堂前を通つた。

県令の夫人が欄干よに倚り、四方あたりの景色を眺めていた。

穢らしい子供が、穢らしい牛を、臆面もなく追つて行くのが、彼女の審美性を傷付けたらしい。

「無作法ではないか、外よそをお廻り」

すると李白は声に応じて賦ふした。

「素面欄らんこう鉤こう二倚り、嬌声外がいとう頭とう二出ツ、若シ是織女二非ズンバ、

何ゾ必シモ牽牛ヲ問ハン」

これに驚いたのは夫人でなくて、その良人おっとの県令であつた。早速引き上げて小姓とした。そうして硯席はべに侍らせた。

ある夜素晴らしい山火事があつた。

「野火山ヲ焼クノ後、人帰レドモ火帰ラズ」

県令は苦心してここまで作つた。後を附けることが出来なかつた。

「おい、お前附けてみろ」

県令は李白へこう云つた。

十歳の李白は声に応じて云つた。

「焰ハ紅こうじつ日ニ随ツテ遠ク、煙ハ暮雲ヲ逐おツテ飛ブ」

県令は苦々しい顔をした。それは自分よりも旨いからであつた。五歳にして六甲を誦し、八歳にして詩書に通じ、百家を觀たという寧馨児であつた。田舎役人の県知事などが、李白に敵うべき道理がなかつた。

ある日美人の溺死人があつた。

で、県令は苦吟した。

「二八誰が家ノ女、飄トシテ来リ岸蘆ニ倚ル、鳥ハ眉上ノ翠ヲ窺ヒ、魚ハ口傍ノ朱ヲ弄ス」

すると李白が後を継いだ。

「緑髪ハ波ニ随ツテ散リ、紅顔ハ浪ヲ逐ツテ無シ、何ニ因ツテ伍相ニ逢フ、応ニ是秋胡ヲ想フベシ」

また県令は厭な顔をした。

で李白は危険を感じ、事を設けて仕を辞した。つかえ

詩的小人というものは、俗物よりも嫉妬深いもので、それが嵩ずると偉いことをする。

李白の逃げたのは利口であつた。

剣を好み諸侯を干して奇書を読み賦ふを作る。——十五歳迄の彼の生活は、まずザツとこんなものであつた。

年二十てきとう性儻、縦横の術を喜び任侠を事とす。——これがそ

の時代の彼であつた。

財を軽んじ施しを重んじ、産業を事とせず豪嘯す。——こんなようにも記されてある。

ある日喧嘩をして数人を切った。

土地にすることが出来なかつた。

このころ東巖子とうがんしという仙人が、岷山みんざんの南に隠棲していた。

で、李白はそこへ走つた。

聖フランシスは野禽を相手に、説教をしたということであるが、

東巖子も小鳥に説教した。彼は道教の道士であつた。

彼が山中を彷徨さまよっていると、数百の小鳥が集まつて来た。頭に

止まり肩に止まり、手に止まり指先へ止まつた。そうして盛んに

啼き立てた。

それへ説教するのであつた。

李白はそこへかくまわれることになつた。

ある日李白が不思議そうに訊いた。

「小鳥に説教が解わかりましたでしょうか？」

「馬鹿なことを云うな、解るものか。あんなに無暗むやみと啼き立てられては、第一声が通りやアしない」

「何故集まって来るのでしょうか？」

「俺が毎日餌をやるからさ。小鳥にもてるのもいいけれど、糞を掛けられるのは閉口だ」

一度彼が外出すると、彼の道服は鳥の糞で、穢かすりならしい飛白かすりを織るのであった。

「一体道教の目的は、どこにあるのでございましょう？」
ある時李白がこう訊いた。

「つまりなんだ、幸福さ」

「幸福を得る方法は？」

「ながいき長命することと金を溜めることさ」

まこと洵にあつさりした答えであつた。

2

「どうしたら金が溜まりました？」

「働いて溜めるより仕方がない」

「その癖先生はお見受けする所、ちつとも働かないじゃありませんか」

「うん、どうやらそんな格好だな」

「働かないで溜める方法は？」

「よくこの次までに考えて置こう」

一向張り合いのない挨拶であつた。

「どうしたら長命が出来ましょう」

「いろいろ方法があるらしい」

「それをお教え下さいませんか」

「俺には解っていないのだよ」

「物の本で読みました所、内丹説、外丹説、いろいろあるよう
でございませぬ。梶木子ほうぼくしなどを読みますと」

「ほほう、それではお前の方が学者だ。ひとつ俺へ話してくれ」

李白これには閉口してしまった。

ある日東巖子が李白へ云った。

「天とは一体どんなものだろうか？」

「ははあこの俺を験ためす気だな」

すぐに李白はこう思った。

「道教の方で申しますと、天は百神の君だそうで、上帝、びんてん 旻天、

皇天などとも、皇天上帝、旻天上帝、維皇上帝、天帝などとも、

名付けるそうでございますが、意味は同じだと存じます。天は唯

一絶対ですが、その功用は水火木金土、その気候は春夏秋冬、日じ

つげつせいしん 月星せいしん辰を引き連れて、ふうしゅうし 風師雨師を支配するものと、私はこん

なようにうけたま承わつて居ります」

「ふうん、大変むずかしいんだな。俺にはそんなようには思われ

ないよ。色が蒼くて真丸まんまるで、その端が地の上へ垂れ下っている。こんなようにしか思われなないがな」

これには李白もギャフンと参った。

「地についてはどう思うな？」

これは浮雲あぶないと思いつながら、真面目に答えざるを得なかつた。

「地は万物の母であつて、人畜魚虫山川草木、これに産れこれに死し、王者の最も尊敬するもの、冬至の日をもつて方ほうたく沢たくに祭ると、こう書物で読みましたが」

「お前の云うことはむずかしいなあ。俺にはそんなようには見えないよ。変な色の、変に凸凹した、穢ならしいものにしか見えな
いがね」

これにも李白は一言もなかつた。

「お前は人の性をどう思うね？」

「はい、孔子に由る時は、『人之性直。罔之生也。』
ひとのせいちよく、これをくりますはせいなり。

さいわいにまぬかれよ
幸而免』こうあつたように思われます。しかし孟子は性

善を唱え、荀子は性悪を唱えました。だが告子は性可能説を唱え、

又楊雄、韓愈等は、混合説を唱えましたそれで」

「だがそいつは他人の説で、お前の説ではないじゃアないか」

「あつ、さようでございましたね」

「で、お前はどう思うのだ？」

「さあ、私には解りません」

「解るように考えるがいい」

「あの、先生にはどう思われますの？」

「俺か、俺はな、そんなつまらない事は、考えない方がいいと思うのさ。形而上学的思弁といって、浮世を小うるさくするものだからな」

これには李白は何となく、教えられたような気持がした。

「不味^{まず}い物ばかり食っていると、肉放れがして痩せてしまう。美味^{まい}物を食べ美味物を」

こう口では云いながら、稗^{ひえ}だの粟^{あわ}だの黍^{きび}だのを、東巖子は平気で食うのであった。

「綺麗な衣裳^{きもの}を着るがいい。そうでないと他人^{ひと}に馬鹿にされる」

こう云いながら東巖子は、一年を通してたった一枚の、穢い道

服を着通すのであった。

「出世をしるよ、出世をしるよ、いい主人を目つけてな」

こう云いながら東巖子は、山から出ようとはしないのであった。

彼は言行不一致であった。

それがかえつて偉かった。

彼は盛んに逆理を用いた。

李白は次第に感化された。

李白は次第に感化された。てきとうふき儻不羈の精神が、軽快洒脱の精神に変わった。

ある日突然東巖子が云った。

「お前は山川をどう思うな？」

「山は土の盛り上ったもの、川は水の流れるもの、私にはこんな

ように思われます」

「さあさあお前は卒業した。山を出て世の中へ行くがいい」

——で、翌日岷山みんざんを出た。

3

開元十二年のことであつた。

李白は出でて襄漢じょうかんに遊んだ。まず南洞庭どうていに行き、西金

陵揚州りょうしゅうに至り、さらに汝海じょかいに客となつた。それから歸つて雲

夢んぼうに憩つた。

この時彼は結婚した。妻は許相公きよそうこうの孫娘であつた。

数年間同棲した。

さらに開元二十三年、太原たいげん方面に悠遊した。

哥舒翰かじよかんなどと酒を飲んだ。

また郡しやうぐんの元參軍げんさんぐんなどと、美妓を携えて晋祠しんしなどに遊ん

だ。

やがて去つて齊魯せいろうへ行き、任城にんじやうという所へ家を持った。孔

巢父うそふほ、裴政はいせい、張叔明ちやうしゆくめい、陶とうべん、韓準かんじゆんというような

人と、徂徠山そらいざんに集つて酒を飲み、竹溪の六逸と自称したりした。

こうして天寶てんほう元年となつた。

この時李白四十二歳、詩藻全く熟しきつていた。

会稽かいけいの方へ出かけて行つた。

剡えんちゆう中に呉筠ごいんという道士がいた。

二人はひどくウマが合った。共同生活をやることにした。

東巖子とうがんしに比べると呉筠の方は、ちよつと俗物の所があった。

それだけにその名は喧伝されていた。

時の皇帝は玄宗であつた。

「剡中の呉筠を見たいものだ」

こんなことを侍臣に洩らした。

呉筠の許へ勅使が立つた。

出て行かなければならなかつた。

「おい、お前も一緒に行きな」

「うん、よし来た、一緒に行こう」

李白は早速行くことにした。

やがて二人は長安へ着いた。

長安で賀知章がちしょうと懇意になった。

賀知章は李白を一見すると、驚いたようにこう云った。

「君は人間なのか仙人なのか？」

「どうもね、やはり人間らしい」

「仙人が誤って人間になると、君のような風采になるだろう。君はたく謫せられた仙人だよ」

「まあさ、見てくれ、謫仙人の詩を」

李白は旧稿を取り出して見せた。

賀知章はすっかり参ってしまった。

「素晴らしい物を作りやアがる。こいつちよつと人間業じやアね

え。君のような人間に出られると、僕の人気なんかガタ落ちだ。だがマアマア結構なことだ。御世万歳、文運隆盛、大いに友達に紹介しよう」

「話せる奴でもいるのかい？」

「杜甫という奴がちよつと話せる」

「聞かないね、そんな野郎は」

「だが会って見な、面白い奴だ。だがちつとばかり神経質だ」

「そんな野郎は嫌いだよ」

「まあまあそういわずに会って見なよ。君とは話が合うかもしれない。ひよつとかすると好敵手かもしれない」

「幾歳いくつぐらいの野郎だい？」

「そうさな、君よりは十二ほど若い」

「面白くもねえ、青二才じゃアないか」

「止めたり止めたり食わず嫌いはな」

「どうも仕方がねえ、会うだけは会おう」

杜甫は名門の出であつた。

左伝癪さでんへきをもつて称された、晋の杜預の後胤であつた。曾祖の

依芸いげいは鞏きやうけん 県の令、祖父の審言しんげんは膳部員外郎であつた。審言

は一流の大詩人で、沈佺期ちんせんき、宋之門そうしもんと名を争い、初唐の詩壇

の花形であつた。

父の閑かんは奉天ほうてんの令で、公平の人物として名高かつた。

杜甫は随分傲慢であつた。弱い癖に豪傑を気取り、不良青年の素質もあつた。ひどく愛憎が劇しかった。それに肺病の初期でもあつた。立身出世を心掛けた。その顔色は蒼白く、その唇は鉛色であつた。いつもその唇を食いしばっていた。人を見る眼が物騒であつた。相手の弱点を見透しては、喰い付いて行くぞというよ
うな、変に物騒な眼付であつた。威嚇的な物の云い方をした。その癖すぐに泣事を云つた。

決して感かんじのいい人間ではなかつた。

体質から云えば貧血性であつたが、氣質から云えば多血質であつた。

いつも不平ばかり洩らしていた。

だが意外にも義理堅く、他人の恩を強く感じた。

忠義心が深かった。

義理堅いのをのぞきさえすれば、彼は実に完全に、近代芸術家に嵌まった。

彼の幼時は不明であった。

が、彼の詩を信じてよいなら——又信じてもよいのであるが——七歳頃から詩作したらしい。

「往昔十四五、出デテ遊ブ翰かんぼく墨場、斯文しぶん崔魏さいいぎノ徒、我ヲ以テ班揚二比ス、七齡思ヒ即チ壯、九齡大字ヲ書シ、作有ツテ一襄のう二満ツ」

すなわちこれが証拠である。

「七歳ヨリ綴ル所ノ詩筆、四十載さい、向フ矣い、約千有余篇」
 こんなことも書いてある。

開元十九年二十歳の時、呉越方面へ放浪した。

四年の間を放浪に暮らし、開元二十三年の頃、京兆の貢拳こうきよに
 応じたものである。

だが旨うまうま々落第してしまった。

4

彼はすっかり落胆した。

奉天の父の許へ帰って行った。泰山たいざんを望んで不平を洩らした。

二年の間ブラブラした。

それから齊せいや趙ちように遊んだ。

それから長安へ遣つて来たのであつた。

李白と杜甫との会見は、賀知章が心配したほどにもなく、非常に円滑に行なわれた。

会后李白が賀知章へ云つた。

「彼は頗すこぶる人間臭い。それが又彼のよい所だ。詩人として当代第一」

また杜甫はこう云つた。

「なるほどあの人は謫仙人だ。僕はすっかり面喰つてしまった。

詩人としては第一流、とても僕など追っ付けそうもない」

互いに推重をしあつたのであつた。

李適之、汝陽、崔宗之、蘇晋、張旭、賀知章、焦

遂、それが杜甫と李白とを入れ、八人の団体が出来上つてしまつた。

飲んで飲んで飲み廻つた。

いわゆる飲中の八仙人であつた。

酒はあんまりやらなかつたが、一世の詩宗高適などとも、李白や杜甫は親しくした。

三人で吹台や琴台へ登り、各自感慨に耽つたりした。

※慨するのは杜甫であり、物を云わないのは高適であり、笑つてばかりいるのは李白であつた。

高適の年五十歳、李白の年四十四歳、杜甫の年三十二歳であつた。

だがこの時代は李太白が、誰よりも詩名が高かつた。

玄宗皇帝が会いたいと云つた。

で、李白は御前へ召された。

誰が李白を推薦したかは、今日に至つても疑問とされている。

ある人は道士呉筠だと云い、ある人は玉真公主だと云い、又ある人は賀知章だと云つた。

すべて人間が出世すると、俺が推薦した俺が推薦したと、推薦争いをするものであるが、これも将しくその一例であつた。

金きんらん鑾殿という立派な御殿で、玄宗は李白を引見した。

帝、食を賜い、あつもの羹を調し、詔あり翰林かんりんに供奉ぐぶせしむ。——これがその時の光景であつた。非常に優待されたことが、寸言の中に窺われるではないか。

彼は翰林供奉となつても、出勤しようとはしなかつた。長安の旗亭に酒を飲み、いう所の管ばかりを巻いていた。

「李白に会いたいと思つたら、長安中の旗亭を訪ね、一番酔つぱらつてゐる人間に、話しかけるのが手取早い。間違ひなくそれが李白なのだからな」

人々は互いにこんなことを云つた。

その時唐の朝廷に一大事件が勃発した。

ほっかい渤海国の使者が来て、国書を奉呈したのであつた。

国書は渤海語で書かれてあつた。満廷読むことが出来なかつた。玄宗皇帝は怒つてしまつた。

「蕃書を読むことが出来なければ、返事をする事が出来ないではないか。渤海の奴らに笑われるだろう。彼奴ら兵を起こすかも知れない。国境を犯すに相違ない。誰か読め誰か読め！」

百官戦慄して言なし矣いであつた。

そこへ遣つて来たのが李白であつた。

飄々乎ことして遣つて来た。

「おお李白か、いい所へ来た。……お前、渤海語が解わかるかな？」

「私、日本語でも解ります。まして謂んや渤海語など」

「それは有難い。これを読んでくれ」

渤海の国書を突き出した。

李白は一通り眼を通した。

「では唐音に訳しましょう」

そこで彼は声高く読んだ。

「渤海奇毒きどくの書、唐朝官家に達す。爾なんじ、高麗こうらいを占領せしより、

吾国の近辺に迫り、兵屢しばしば吾界ごかいを犯す。おもうに官家の意に出でむ。

俺われ如じよ今こん耐たうべからず。官を差し来り講じ、高麗一百七十六城を

將もつて、俺に譲与せよ。俺好物事あり、相送らむ。太白山の兔、南

海の昆布、柵城の鼓、扶余ふよの鹿、鄭てい頡ぎつの豚、率そつ賓びんの馬、沃よう

州ゆう綿めん、泌河びんひつがの鮒、九都の杏、樂遊がくゆうの梨、爾、官家すべ

て分あり。若もし高麗かうらいを還かえすことを肯んぜずば、俺、兵を起こし来

たつて廝殺せむ。且つ那家が勝敗するかを看よ」

皇帝はじめ文武百官は、すっかり顔色を変えてしまった。

「いま辺境に騒がせられては、ちよつと防ぐに策はない。一体どうしたらいいだろう」

風流皇帝の顔色には、憂が深く織り込まれた。

誰一人献策する者がなかつた。

5

すると李白が笑いながら云つた。

「文章で嚇おどして来たのです、文章で嚇して帰しましょう。蕃使をお招きなさりませ、私、面前で蕃書を認め、嚇しつけてやること

に致します」

翌日蕃使を入朝せしめた。

皇帝を真中に顯官が竝んだ。

紗帽さぼうを冠り、白紫衣はくしいを着け、飄々と李白が現われた。勿論微醺

を帯びていた。

座に就くと筆を握り、一揮して蕃書を完成した。

まず唐音で読み上げた。

「大唐天宝皇帝、渤海の奇毒に詔諭す。むかしより石卵は敵せず、蛇龍は闘わず。本朝運に応じ、天を開き四海を撫有し、將は勇、卒は精、甲は堅、兵は鋭なり。頡利きつりは盟に背いて擒とりこにせられ、普ふ賛さんは鷲を鑄って誓を入れ、新羅しらぎは織錦の頌を奏し、天竺てんじくは能言

の鳥を致し、沈斯ちんしは捕鼠の蛇を献じ、弘林ふつりんは曳馬の狗を進め、
 白鸚鵡は訶陵かりようより来り、夜光珠は林邑りんゆうより貢し、骨利幹こつりかんに
 名馬の納あり、沈婆羅ちんばらに良酢の献あり。威を畏れ徳に懐なき、静を
 買かい安を求めざるなし、高麗命を拒ふせ、天討再び加う。伝世百一
 朝にして殄滅す。豈あに逆天の咎徴、衝大の明鑒に非いずや。況いや爾
 は海外の小邦、高麗の附国、之を中国に比すれば一郡のみ。土馬
 芻糧万分に過ぎず。螳怒是れ逞たくましうし、鵝驕不遜なるが若ごときだに及
 ばず。天兵一下、千里流血、君は頡利の俘とりこに同じく、国は高麗の
 続とならむ。方今聖度汪洋、爾が狂悖を恕す。急に宣なしく過を悔
 い、歳事を勤修し、誅戮を取りて四夷いの笑となる母なれ。爾其れ三
 思せよ。故に諭す」

実にどうどうたるものであった。

皇帝はすっかり喜んでしまった。

そこで李白は階を下り、蕃使の前へ出て行つた。文字通り蕃音で読み上げた。

蕃使面色土のごとく、山呼拝舞し退いたというが、これはありそうなことである。

奇毒、すなわち渤海の王も、驚愕来帰したということである。

「俺は長安の酒にも飽きた」

で、李白は暇いとまを乞うた。

皇帝は金を李白に賜つた。

李白の放浪は始まった。北は趙魏燕晋ちよゑんしんから、西は※岐ぶんぎまで足を延ばした。商於しょうおを歴て洛陽に至った。南は淮泗わいしから会稽かいけいに入り、時に魯中ろちゆうに家を持ったりした。齊や魯の間を往来した。梁宋には永く滞在した。

天^{てん}宝^{ほう}十三年広陵に遊び、王屋山人魏万ぎまんと遇い、舟を浮かべて秦淮しんわいへ入ったり、金陵の方へ行ったりした。

魏万と別れて宣城せんじやうへも行った。

こうして天寶十四年になった。

ひっくり返るような事件が起こった。

安祿山が叛したのであった。

十二月洛陽を陥いれた。

天宝十五年玄宗皇帝は、長安を豪塵して蜀に入った。

李白の身边も危険であつた。宣城から漂陽にゆき、更にえんちゆ剡中うに行き廬山に入った。

玄宗皇帝の十六番目の子、永王というのは野心家であつたが、李白の才を非常に愛し、進めて自分の幕僚にした。

安祿山と呼応して、永王は叛旗を翻えした。弟のじようせいおう襄成王としゆうし舟師しゆうしを率い、こうわい江淮こうわいに向かつて東下した。

李白は素敵に愉快だつた。

「うん、天下は廻り持ちだ。天子になれないものでもない」
こんな事を考えた。

詩人特有の白昼夢とも云えれば、てきとうふき儻不羈てきとうふきの本性が、仙骨を破

つて迸すこぶしたとも云えた。

意気頗すこぶる軒昂けんおウであつた。自分を安石あんせきに譬たとへたりした。二十歳代に人を斬つた、その李白の真骨頭が、この時躍如としておどりに出たのであつた。

「三川北虜乱レテ麻ノ如シ、四海南奔なんぽんシテ永嘉ニ似タリ、但東山ノ謝安石しゃあんせきヲ用ヒヨ、君ガ為メ談笑シテ胡沙こさヲ静メン」

などとウンと威張つたりした。

「試ミニ君王ノ玉馬鞭ぎよくばへんヲ借り、戎虜じゆうりよヲ指揮シテ瓊筵けいえんニ坐ス、南風一掃胡塵こじん静ニ、西長安ニ入ツテ日延ニ到ル」

凱旋の日を空想したりした。

ところが河南の招討判官、李銑りせんというのが広陵に居た。永王の

舟師を迎え討った。

永王軍は脆く破れた。

永王は箭やに中あたつて捕えられ、ある寒駅で斬殺された。そうして弟の襄成王は、乱兵の兇刃たおに斃たおされた。

李白は逃げて豊沢に隠れたが、目つかつて牢屋へぶち込まれた。

「どうも不可いねえ、夢けだったよ」

懽然として彼は呟いた。

「兵を指揮するということは、韻をふむよりむずかしい。そうすると俺より安石の方が、人殺しとしては偉いらしい。もう君王の玉馬鞭なんか、仮にも空想しないことにしよう……。ひよつとかすると殺されるかもしれねえ。何と云つても謀反人だからなあ、

もう一度洞庭どうていへ行つて見たいものだ。松江の鱸すずきを食つてみたい。女房や子供はどうしたかな？ 幾人女房があつたかしら？ あつ、そうだ、四人あつたはずだ」

李白はちよつと感傷的になつた。

無理もないことだ、五十七歳であつた。

李白は皆に好かれていた。

新皇帝 肅しゆく宗そうに向かつて、いろいろの人が命乞いをした。

宣慰大使 崔 渙せんいたいしさいかんや、御史中丞 宋若思ぎよしちゆうじようそうじやくしや、武勳赫々たる郭か子儀くしぎなどは、その最たるものであつた。

そこで李白は死を許され、夜郎へ流されることになつた。

道々洞庭や三峡や、巫山ふざんなどで悠遊した。

李白はあくまでも李白であつた。竄逐さんつゐされても悲しまなかつた。いや一層仙人じみて来た。人間社会の功業なるものが全然自分に向かないことを、今度の事件で知つてからは、人間社会その物をまで、無視するようになってしまった。

乾元かんげん二年に大赦があつた。

まだ夜郎へ行き着かない中に、李白は罪を許された。

そこで江夏岳陽に憩い、それから潯陽じんようへ行き金陵へ行つた。

この頃李白は六十一歳であつた。また宣城や歴陽へも行つた。

あつちこつち歩き廻つた。

到る所で借金をした。九割までは酒代であつた。

のべつに客が集まつて来た。

やがて宝応元年になった。

ある県令に招かれて、采石江で舟遊びをした。

すばらしく派手やかな宮錦袍を着、明月に向かつて酒気を吐いた。

波がピチャピチャと船縁を叩いた。

十一月の月が水に映った。

「ひとつ、あの月を捕えてやろう」

人の止めるのを振り払い、李白は水の中へ下りて行った。

水は随分冷たかった。

彼の考えはにわかに変わった。

どう変わったかは解らない。

李白は水中をズンズン歩いた。

やがて姿が見えなくなつた。

それつきり人の世へ現われなかつた。

「李白らしい死に方だ」

人々は愉快そうに手を拍つた。

東巖子とうがんしは岷山みんざんにいた。

相変わらず小鳥の糞にまみれ、相変わらずぼんやりと暮らして
た。

ある日薄穢い老人が、東巖子を訪れて来た。

「先生しばらくでございます」

「誰だったかね、見忘れてしまった」

老人は黙って優しく笑った。

なるほどまさしく薄穢くはあつたが、底に玲瓏たる品位があつた。人間界のものであり、同時に神仙のものである、完成されたる品位であつた。

で、東巖子は思わず云つた。

「おお貴郎あなたは老子様で？」

「いえ私は李白ですよ」

「いえ貴郎は老子様です」

東巖子は云い張つた。

「どうぞ上座へお直り下さい」

李白は平気で上座へ直った。

数百羽の小鳥が飛んで来た。音を立てて庵の中へ入った。

そうして東巖子の頭や肩へ……いや小鳥は東巖子へは行かずに、李白の頭や肩へ止まった。すぐに李白は糞まみれになった。

今でも岷山ひなたのどの辺りかに、李白とそうして東巖子とが、小鳥を相手に日向ひなたぼっこをして、住んでいる事は確かである。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇全集 卷六」未知谷

1993（平成5）年9月30日初版発行

初出：「大衆文芸」

1926（大正15）年4月

※漢詩漢文の読み下し文の旧仮名づかいは底本通りです。また促音の大小の混在も底本の通りです。

入力：阿和泉拓

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年10月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

岷山の隠士

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>